身の程知らずの恋

透明な石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
身の程知らずの恋

【Ｎコード】
Ｎ８７９６Ｐ

【作者名】
透明な石

【あらすじ】
１０年前に高嶺の花のご令嬢に一目ぼれした幼馴染の恋愛相談に乗る主人公。女心が知りたいという幼馴染に告白の練習相手にされ、お馬鹿な彼にため息をつきながらも、彼を見守ってきた主人公の心情とは…

バラが咲き誇る庭園。真っ白な建物。森の中で迷って出てきた先が、夢かと思うぐらい大きくて立派な洋館だった。場違いにもほどがある。幼いながらにも、その風格に圧倒されていた俺は、鼻をたらしながらでかい屋敷を見上げることしかできなかった。
大きな窓のレースが揺れる。

「誰？」

小鳥のさえずりのような声とともに、少女が顔をのぞかせる。
漆黒の髪はつややかで、白い肌はまるで陶磁器のようになめらか、
そして、可憐で小さな唇は桃色で、しっとりとしている。

それは、もう。

恋に落ちたとしか言えなかった。

「それから、早１０年。少女は年ごろとなりより一層その美しさを増し、少年は立派な青年へと成長し、頭に五円ハゲを作りあげるまでに至った」

「何！？その説明、いったい誰にしているの？っていうか、俺五円ハゲないからね、あれは学生時代の話だから」

そんな必死にならなくても…、と冷めた目で男の方を見ると、彼は頭を私の方に向けて必死にアピールしている。正直、彼にハゲがあろうとなかろうと、私はどうだっていい。

「そんなことより、早く始めない？」

せかすようにいって、ようやく彼も私と顔を突き合わせている理由を思い出す。

「では、…こほん」

「す、す、す、しゅ…」

「好きですって？」

真っ赤になってどもっている男を前に私はため息交じりに答える。

「そう彼女にいったら、『あら、わたくしもこのお紅茶大好きなんですの？フフフ』って言われたんでしょ。少しは学習しなさい。同じことやっても同じ結果しかないわ」

「わかっているよ」

そう答えながらもしょぼくれた彼。

彼と私は幼いころからの友人だ。両親も仲がいいので、家族ぐるみの付き合いをしてきた。一言でいえば、幼馴染というやつだ。実直

で真面目な彼が唯一腹を割って話せる相手が私らしい。そのせいで、ここ１０年ほど、彼に会うたび恋愛相談ばかり付き合わされている。

「お嬢様に振り向いてもらえるようなセリフがいいたいんでしょ？」

同じ女ならわかるだろ？とわけのわからない理由で、かれこれ２週間は同じ内容につきあわされている。

「じゃあ」

「愛しているよ」

「…重。ただの友人から、そんなこといきなり言われたら引くわ」

「えー。これなら俺の気持ちに気付いてくれるだろ？」

「気づいてもらっても、嫌われたら終わりだからね。あのお屋敷にすら足を踏み入れられなくなるよ」

「そ、それは困るな。ただでさえ、使用人の人には嫌な顔をされているのに」

あの劇的かどうかは知らないが運命の出会いの後、しばらくは隠れてこそこそと会いに行っていたようだが、使用人にばれて、ひと悶着の後、お嬢様の友人として週に一度会いに行くのを無理やり了承させたらしい。恋とは恐ろしい。

「Ｉ　ｎｅｅｄ　ｙｏｕ」

「なぜ英語！！」

「いや、かっこいいからさ」

「英語かっこいいって、小学生か？」

「たとえばさ俺がやっている金細工が世界各地に出回った時にさ、しゃべれないと苦労するだろ。それに、これから仕事していく上で彼女がいたら、いや彼女がいなくちゃだめだっていうのが伝わらない？」

「…はぁ」

のろけか…。この口下手な男が商売で身をたてているのは、ひとえに彼女のためだ。彼女とともにあるためには、彼女に家に並べるような地位と財産を手に入れなければならない。そのために必死になって働いている姿を見てきた。最初はどうなるかと思っていたが、今では一番の出世頭にまでなっている。

「心底惚れてる」

「渋っ！！」

「ダンディな感じがしてよくない？」

「ダンディって言えばそうだけど、もっと奥ゆかしい、人生の酸いも甘いも知っている人にいわれたら、もうしびれるね」

「俺だって、結構…」

「18なんて、まだまだだよ。あと20年ぐらいしたら響くわね」

彼は、手元のケーキをいじくりまわしながら、思案している。食べ物で遊ぶような人はまだまだガキだ。なんて言おうかと思ったがやめた。

今、私たち二人は甘味屋にいる。ケーキ、クッキー、イチゴ大福、ひいては羊羹まで置いている（無節操ともいう）、ここらじゃ有名だ。その店の一番奥のテーブルで二人で座っている。

彼は、この店の跡継ぎ娘を前にして、このケーキがだれによって作られたのかも気付かない。

「傍にいられたら、幸せなんだ」

背伸びしていない。ただ、ありのままの彼の言葉。

こぼしたことにも気付かない、本音。

「思ったままを伝えればいいんじゃない。無理に作っても、届かないよ」

そういうと、彼はまだ納得いかないのか、不安が残っているのか、渋い顔をしたままだ。

そんな彼に、私は腕時計を見せる。時間を見た瞬間、彼の顔が青ざめる。

「こんなことしている暇はないでしょ」

「うわ、まずい」

彼は、傍にあったカバンをとると、店を出る。

「待って」

向けられた背中に声をかける。いつも見送る背中は遠い存在。顔だけ向けられた彼に、近くの菓子をつかむと、投げた。しっかりとキャッチされるのを確認して、声をかける。

「伊達男は手ぶらじゃ行かないよ」

彼は何も言わずにこりとわらった。

１０年前、顔を真っ赤にして私のもとに走ってくると、彼はいった。

「好きな人ができた！！」

唖然とする私を置いて、彼はあったことをひたすら語る。大きな屋敷、バラの庭、黒髪の少女、綺麗な声、優しいほほ笑み…どこか遠くを見つめるようなその瞳は、もう私の知っている彼じゃなかった。

恋を知った彼に、私は恋をした。

それからというもの、彼はすべての行動に、彼女を想った。勉強もスポーツも、親の手伝いだって、気を抜くことはなかった。これができなきゃ、彼女に嫌われる。こんなのじゃ彼女に振り向いてもらえない。その必死の様は、私だけでなく周りも驚かせた。

それもすべて、彼女に釣り合うため、

本当はわかっている。
どんなに頑張っても、実力があっても、家柄という壁は乗り越えられない。
それでも、それでもと、彼は前に進む。
あの頃と同じ真っ直ぐな瞳で、あの頃と変わらないまっすぐな思い、だが、あのころとは全く違う姿。
言葉だけじゃなく、実力をつけていく彼に、私は後ろから眺めるしかできないけれど、その姿が好きだった。

彼女が好きな彼が好き。

だから、諦めないで。まけないで。
どうか、思いがかなってほしい。

閉じた瞼に涙がにじんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8796p/

身の程知らずの恋

2011年1月8日13時05分発行